
アマツ風に吹かれて

笠野芭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマツ風に吹かれて

【NZコード】

N6191C

【作者名】

笠野芭

【あらすじ】

時勢に沿つた様相に変わりつつある京都の初秋。京都文教女子短期大学の附属高等部一年に在籍する美穹乃は、中一の晩夏に失踪した幼馴染み、励と再会する。美穹乃の想い出の中では、明るく快活で心優しい少年であった励。しかし、三年間もの月日を跨いで再会した幼馴染みは、まるで別人になつたかのように豹変していた・・・。関わった人間を必ず不幸に陥れる天の吐息。『アマツ風』を追つて、励は自らに課した責務を果たそうとする。変わりゆく古の街と、変わってしまった大切な人。美穹乃は不幸を招く風を鎮めるた

め、失われてゆく形を忘れぬよう、人々の運命が錯綜する十字路を
駆ける。

プロローグ

「風は、何処から来ると思う？」

男の問いに、姿なき者が応えた。それは、笛の音色に似た鳴き声でさえずりながら、気圧の低い方へ緩やかに流れてゆく。

無抵抗にはためいた白衣が、男の垂れた腕にまとわりつく。男は払おうともせず、屋上へ到る唯一の進入経路である金属の戸へ視線を移す。

「誰だ？」

白衣の男は、生徒用に加工していない言葉を音声に変換した。風が撫でる髪に隠された瞳孔は、先駆的なデザインの眼鏡に乱反射した陽光へ鋭敏に対応して、縮む。

「須賀先生。私です」

籠つた声はそう予告し、続くように、鉄が擦れる音と共に小さな女学生ためらいがちに顔を覗かせる。

「……君か」

白衣の男 須賀庵理は、言つて前髪を手で払い。

「今日の講習は終わつたはずだが。何か、質問か？」
滑らかに句を継いだ。

「私が須賀先生に今日したい質問は、講座の後での全部です」
受け答えしつつ、背に回した手で進入経路を塞いだ女学生は、頬

に流れる黒髪の末端を両手でこめかみに留めた。

大学生にしては華奢で小さ過ぎる体躯は、今は気にならない。

「疑問の捌け口として先生を選んでくれたのは光栄だ。けど、『今日したい質問』は済んだのだろう? これ以上、先生は君の期待には応えられないと思うが」

「はい。仰りたいことは良く分かります。ただ……」

「ただ?」

言い憚る女学生に、須賀は声と目で促す。

女学生は風で暴れる髪を両手で鎮め、

「私は、須賀先生の研究なさっていることに興味があるんです!」しつかりと発言した。

「……どこまで知っている?」

田を細め、白衣に両手を収めた須賀は、重ねて質す。どの範囲まで把促しているんだ? と。

「今朝……」

女学生は、無垢な黒い瞳を須賀に示し、

「同級の早乙女さんの両親が事故で亡くなりました。それに、何らかの形で須賀先生が関わっている。

……私が、分かります」

言つて、一步ずつ須賀との距離を縮めてゆく。

呆れたように深く息を吐いた須賀は、風が強いなと笑いながら視線を虛空中をまわせ、速まる鼓動を律した。

落ち着いたところで、適度な距離で歩みを止めた女学生へ顔を遣り、

「根拠は？ あるんだろうね。楽しみだ」

「ありません」

須賀の掛けた鎌に即答する女生。

「……ない？」

露骨に、須賀は拍子抜けした素振りを見せた。演技だ。女学生は、相対して真摯な口振りで、「ただ、証人はいます」

「証人？」

須賀は鼻で笑つた後、

「君は突飛な嘘を考えるね」

「嘘じゃありません！」

微笑を浮かべる須賀は言葉を被せるよ、
「じゃあ、連れてきてくれないか。その証人を」
追い討ち。

「…………」

しばらく、沈黙が時間の経過をつやむやにする。

風のさえずりのみが場を占有し、天から射す陽光が京都大学の屋上に陰を作る。

「 証人なら、ここにいるぜ」

青臭い声は、金属の戸から聴こえた。

素早く視線を飛ばし、沈着としたまま動じない須賀をよそに、「ど、どうして！？」「信じられないっ」と。なぜか混乱しているのは女学生の方だった。

(パフォーマンスか?)

平常心を屋上から落としてしまったかのよつに狼狽する女学生を横目で観察しながら、須賀は憶測を巡らす。

(にしては、冗談が過ぎる)

唯一の出入り口に向かって一歩、須賀が踏み出した刹那。金属の戸が重量感のある音をたてた。

人物を認識した須賀の表情が一瞬にして曇り、

凍る。

「生きて……いたのか?」

「ああ、風には見放されたけどな」戯けた調子は声色にも表れず、少年はあつさり不可解な言葉を口にした。

眩しそうに彼方を眺める横顔は、暢氣に半身が向く方位に帰ってきた。同時に、逆光の覆面は遙か上空に漂泊する雲の気まぐれに従い、少年の顔面から剥がされる。

学問に従事する者が集う施設とは不釣り合いな面持ちが

そこにあつた。

プロローグ（後書き）

叙情的に綴られる短いロマン（小説）です。

構成なしの放任執筆ですが、内容には一切手を抜くつもりはありませんので、物語の帰着まで成るようになるに成るであろうと考えても大丈夫です。現在、掛け持ちしているタイトル（作品）についても、成るようになります。大丈夫です。解釈としては、あつちはドラマでこつちはシネマでしょうか。更新の頻度は、「慣れ」次第です。

第一話 告げる風

へー

小学校の先生になるのが夢だった。

先生の存在を『教師』と認識できるようになった今でも、それは変わらない。夢としての形は変わらない。
でも、搖らいでいるのは確かだ。

永劫の憶分の一にも満たない夏休みを終え、早、三週間が経過する。

高校生活を重ねるたびにその退屈さを肥大化させる授業を曖昧に聞き流し、旭川美穹乃は近頃の自分を誰にともなく実況中継していた。無名のアナウンサーによる音声のない中継が、果たして放送局と繋がっているかどうかは、暗黙の常識から推定するしかない。

旭川美穹乃。十六歳。

小学校の国語の教師である母が考案した名前は、美しい空の汝という意味らしい。最近、初対面の相手に挨拶をした後の第一声が名前に關する感想からだと、分かつてきた。

古い人種である父は、愛娘に淑やかな京都美人に育つてほしいと願つて いるつぼく、小から大と連なる女子一貫校へ半ば強引に押し込めた。美穹乃が小学校の教師を目標に定めているという周知の既成事実も兼ね、晴れて文教女子短期大学の附属の下に美穹乃の将来は委ねられたのだった。

他意はない。反発もなかつた。

同性なお陰で隔たりなく親しめる女友達も、沢山できた。ここまで育ててくれた両親にも感謝している。いつか、親孝行をしたいとも思っている。

ただ

何かが足りない。欠落している。最近は特に、そんな虚無感にかられる時間が多くなってきた気がする。

今も、そう。

「ねえ。あの先生さ、カツ「良くない?」

「暗黙の了解でしょ。そのくらい」

「ウソ? ! まさか志帆つちも狙つてるの?」

「さあ、どうかなー」

通路を挟んで隣接する席から、女子特有のひそひそ話が繰り広げられている。

系列の校舎に男子生徒はいない。この程度、日常茶飯事の域だ。

(ああ。心底やる気なくす)

倦怠感の過密する顎を両手の平で支え心中で愚痴た美穹乃は、窓際の席であることを最大限に利用し、初秋にして色氣づく早熟な紅葉をぼんやり眺める。年齢の層で分けられた校舎には、京都を象徴させる秋の色が鏤められていた。

四階からなら眼球を動かせなくとも位置を確認できる体育館では、どうやら大学生の先輩がバレーを演習しているようだ。声が、男子並に太い。

うつすらと、最近テレビで放送されたホラー映画の断末魔の叫びを彷彿した。惨劇と化した体育館を想像して気持ち悪くなつた美穹乃は、周囲に悟られぬよう自然な動作で自分の肩を抱く。

学校の敷地から外、界隈には、年期の入つた寺院が多数点在して

い
る。

伽藍へと続く参道に負けないくらい車道も通つてはいるが、車を
乗り回すのはもっぱら観光客。まさか、舞子と呼ばれる芸者が着物
姿で車を操つてはいるなんてことはない。どこの都道府県が源泉の
根も葉もない迷信だ。観光のパンフレットを妄信する無知な外国人
でも、そんな冗談を信じたりはしないだろ。

生徒の大半が待ち詫びていたチャイムが校舎に響き、「起立！」
「礼！」と続く律儀な形式に、教室を占める一二十数名全員が従つた。
午後の授業は閉幕。

水を得た魚のごとく加減なき音量で談笑する大多数を尻目に、一人
の生徒が規則的かつ無駄のない迅速な所作で、帰り支度を始めてい
た。

美穹乃は終始夢中で話す友人を手で制して、鞄を抱いたまま教室
を去ろうとする彼女を追う。

「喩樹。今日も、塾？」

廊下まで駆けた美穹乃はいつもの声色で、早乙女喩樹を引き止めた。
「葬式。親、死んじやつたから……」

背を向けたまま、喩樹は事情だけを口にした。

(へ……何、まさかジョーク？　喩樹が？)
「ホント？　いつ？」

「今朝」

言つて、ようやく美穹乃の方へ首を回す。明らかになつた表情は、
無の膜を張つていた。

「だつて、普通に受けてたじやん。授業」

喻樹はいつも大人しく席に座っているような、物静かな子だ。本いわく、自分は根暗で無愛想。美穹乃は否定しなかつた。否、できなかつた。漢字を読めなかつた頃から喻樹を知つてゐる、美穹乃だからこそ。

「……美穹乃には無関係でしょ。私の両親がどうなると」後頭部の髪を軽く留めてできた尾を揺らし、喻樹は進むべき通路へ視線を戻した。

まだ、生徒の影はない。

「あたしにだつてカンケーある!」

美穹乃は考えなしに、喻樹の主張を否定した。あの時はできなかつた否定を。

「一、三歩のところで歩行を中断した喻樹は、勢いよく振り向き別に困らないでしょ? 美穹乃は」
皮肉をぶつけた。

「困らない……けど」

喻樹の強い弁舌に言い淀む美穹乃は、俯く。
隙を見計らつて、喻樹は速足で行つてしまつた。美穹乃は追おうとした。

けど

「美術館廃止になるつて、今のつり觀に行こつよ」

「うん。行こ行こ」

隣の教室から後輩の生徒が飛び出してきた。

面食らつた美穹乃は、しばらく茫然と立ち尽くすことを選ぶ。

(あたし……、バカだ)

京都の風情から乖離した近代的な市街は、学校を出て西へ、小川一本越せば見えてくる。

旭川家、つまり美穹乃の住まいが地理的に位置するのは、ちょうど京都市中心街と京都大学の中間だらうか。京大医学部の管轄である附属病院も、当然、近くにある。何かあつたときには好都合だ。美穹乃は何気に勘織る。何かとは何なのだろう？ 病気？ それとも事故？

そんなこと、自分には無縁に思えた。否、そう思っていたいのが人の性分なのだ。美穹乃が特別、樂觀的な訳ではない。

不意に空を仰げば、あたかも王城のように街路の中核に鎮座するデパートが、施錠を忘れた美穹乃の視界を陣取る。

京都は変わった。

美穹乃の周囲にいる大人は、そればつかだ。何が変わったのだろう？ 単純に風景？ 町か街？ あるいは人？

かつて団塊と称されていた世代の間で謳われている『昔の京都』を知らない美穹乃には、想定できる変化に具体性を求めることができなかつた。

ついさつき経験した苦汁をしきりに頭を働かせることで誤魔化しながら、美穹乃は侘びしい歩道を行く。夕暮れが近づくに連れ、人の往来は遞増する一方に傾いていた。

氣鬱から俯きぎみに歩いていた美穹乃は、濡れた雑巾を壁に打ちつけたかのような音にびくんと反応し、それに続いた短い悲鳴に、無意識に顔を上げた。

幾重にも交錯する車道が敷かれた大通りで、その光景は展開して

いた。

「ウソ？ 事故……？」 呟いた美穹乃が視線を送る先には、動物っぽい何かの死骸。否、まだ死んではないかもしない。

大通りの中心から立ち込めるのは

不快感と、

風が散らす臭氣。

「やだ……、猫？」

「やけに大きいな。野良猫のボスか？」

悲鳴のした方向とは別の位置から、大学生のカッフルらしき一人組が目先の情報を垂れ流した。

（なんか不吉……。事故ったの猫なんだ）

確かめるのは野暮だ。美穹乃是踵を反し、全力で走つてこの空気から逃げようとした。

一刻も早く

「つて……、あらららああ？！？」

刹那に吹いた強風に背を押され、美穹乃是対応しきれず下半身を基礎にした均衡を崩し

前屈みにずつこけた。

「痛つた……。誰？ 押したの」

愚痴りながら身を起こして、美穹乃是転倒した位置を顧みる。

「へ……？」

誰一人いなかつた。影も形も。

美穹乃是性急に辺りを見渡したが、はり命あるモノの姿は見受けられない。

「これつて……、どゆこと？」

不安を紛らわすため咳いた美穹乃是、痺れの発信源であるう両肘

の擦り傷を確認する。いくつか痕があった。気づけば、露出した脚にも数箇所できていた。

「もう、最っ低い……」

美窓乃是溜め息まじりに愚痴た後、脇道から覗く小川の脈に沿つて、片足を微妙に引き擦りながら駆け出した。この路地は、たまにしか利用しない自宅への近道だった……。

△△

「患者が消えた！？」

「はい。すべての病棟を捜したんですが……」

控えめに陽光が射し込む院長室で頭を下げるのは、看護士として常勤する京大医学部の男子学生。用件は、担当する患者の失踪。

「いつだ？」

「はい？」

分からぬといつた様子で直立する見習い看護士に、五十の台に乗つたばかりの院長は、

「私は君にいつだと訊いてるんだ！ 患者がいなくなつたのは、いつだと」

声を荒げた。

「は、はい。一時間半前です」

直立不動はそのまま、青年は質問に答えた。

「一時間半？ その間、君は何をやつていたんだね」

質す院長に、青年は姿勢の水準を一段階上げ、「はい。さきに言つた通り、患者を捜していました」

「報告は？」

「はい。今が、最初で最後です」

椅子の肘掛けに腕を置く院長をしかと見据えながら、青年は発言する。

「不要な混乱を避けるため、他の看護士や医師には話していません」

「 馬鹿者……」

怒号が被さる。

「先にすべきは上への報告だろ？が！ 君は、脳系統の神経に何か欠陥があるのかね？ 話は終わりだ。とつとと私の前から失せろ」

「ああっ、はい！ 失礼しました」

大学病院の全責任を背負つている院長の剣幕に圧倒され、青年はパニクリながら部屋を退こうとするも

「待たんか！」

怒声が跳ねた。

青年は恐る恐る背後を窺つて、

「何でしようか？」

尋ねてみた。

椅子にもたれる院長は、概観して表情からは憤怒が読み取れない。

「名前」

「はい？」

すっとぼける青年に、院長は立場という蓑みのに潜らせた憤慨を露にして、

「消えた患者の名義だ！！」怒鳴った。

「……はあ、それが」

青年は堪らず院長から目を逸らして、

「調べても、住民登録されていなかつた名義でして……」

声色を落とす。

「いいから、やつたと教える」

組んだ腕を解き、苛立つた口調で促す院長。自信なわけに、青年は院長のそれに視線を寄越し、

「十六、七の少年なんですが、千歳勵と名乗ります。女っぽい名前ですし……、変じやないですか？」

偽名ではないか、と共感を誘う青年。院長は椅子を回すことで、それを視界から外した。

千歳勵。

おそらく、いや確實に院長は聞き覚えがある。ただならぬ横顔から覗う察した青年 くつかけみきひで 脱掛幹秀は、音をたてぬよう細心の注意を払いつつ、部屋を後にした。

〔4〕

美穹乃が自宅に帰つてからまづ最初に行つたのは、傷口の洗浄。シャワー備え付きの浴槽ではなく、台所に乗り上げつて処置をした。踏み台にしたのは付近の椅子。母が、棚の高い位置に収納される食器を取り出すときに用いる奴だ。次に、救急箱の搜索。これは、意外にもすぐに見つかった。数珠つなぎの絆創膏を三つほどちぎり、一時は肘と膝の痕を塞いだものの、「みつともない」と嘆いた美穹乃は、貼つたばかりの絆創膏をすぐに剥がしてしまった。

その後、迷わず自分専用の部屋に向かつた美穹乃は、コンクリの塗装で汚れた制服をベッドに投げ捨て、タンスから引っ張り出してきたカジュアルな上下をなるだけ急いで着た。意図的につけられた傷のないデニムのズボンを穿くのは、すごぶる久々だった。若干、サイズが厳しかったが、「女の子はこれくらいがベストでしょう」との一言により、最近ちょっとだけ太くなつた自分の脚を美穹乃は肯定することにした。肘の痕は、シャツの上に重ね着した丈のあるジヤケットで隠蔽。

「うし！ あたし完璧」

等身大の旭川美穹乃を映す鏡に『Good』をキメた美穹乃は、鞄から探し当てた財布をズボンに突っ込んで、寝転がつてくつろぎたい衝動を誘発するマイルームから脱出した。

（喻樹の言つてたことがほんとなら。葬儀、行かなきや）
幼馴染みとして……。

^{5}

京大総合人間学部の助教授である須賀庵理は、与えられた自室のデスクに腰掛け、個人のサーバーに宛てられたメールを読んでいた。他県の大学への出張に関する予定を主に、修士過程を控えた学生からの論文絡みの依頼など。別段、返信に急を要する訳ではない。助教授に昇進して三年も経つ須賀には、そして意識せずとも記憶に刷り込むことは可能だ。

対して、數十分前から須賀の明晰な頭脳を支配する“研究対象”に関連した事柄は、メールに乗せられた些細な事項とは比較にならない。

助教授就任。おめでとさん。

パソコンに展開するウィンドウを眺めながら、須賀は数十分前の会話を反芻していた。

千歳か？ 生きていたんだな。

見りや分かんだら。それとも、あんたの眼にや穴あいてんのか？

三年間、なぜ失踪を演じていた？

いいのか？ お抱えの生徒さんが聞いてるぜ。

すっかりぬるくなつたコーヒーを喉に通した須賀は、目頭を押さえるながら椅子に躰を癒着する。

ドアを連続して叩く音の後、

「須賀先生。お邪魔してもいいですか？」

理知的でいて、どこか愛らしさの残る声が、ドア越しに聴こえた。

「君の判断に任せる」

目頭から指を離した須賀は、大きめな声で煽つた。

「はい。では……」

言つたのちドアを引いて、

「失礼します」

小さな女学生が、決して立派ではない体躯を晒す。

須賀の記憶では、名前は篠塚彌生しのづか やよい。須賀の指導する三年生だが、実質上の学力は修士過程のみならず、博士過程の学生にすら匹敵する水準だろう。といつても、指導教官である須賀の評価だが……。

「先程の件か？」

冷めたコーヒーを捨てに立った須賀が、彌生の顔を見ずに言つた。
「ええ、先生の口から話してもらわないと、気が気じやありません」「大袈裟な、と須賀が振り返り表情を窺うと、彌生は真摯な眼差しを返してきた。

「あの少年は、須賀先生の何なんですか？」

「その前に」

投げかけられた質問には応じず、須賀は茶色い液体を台所に流しながら、

「君が彼と知り合つた経緯を、話してもらおつか」言つて、顔だけ彌生へ寄越した。

「……そうですね。それが道理です」

ドアを背に立ち尽くす彌生に、コンロでお湯を沸かし始めた須賀は冷静な口調で、

「座つたらどうだ。コーヒーもすぐに煎れる」

論文を提出しに訪ねて来る学生用の椅子を勧めた。

「あ、私がコーヒー煎れようと思つたんですけど……。まあ、いいです。今回は見逃しましょう」

須賀の行動に目をつむつたらしい彌生は、引いた椅子にちょこんと腰を落とし、軽やかなスカートを臀部の下に片手でするつと通した。

(「コーヒーを煎れようとした?」「は、僕の自室なんだが……」)

京都で亡くなつた者の葬儀は、大抵、命日であるその日か翌日までに執り行われる。

京都市には寺院が広く遍在しているが、その中でも正式な修行を経た住職が管理している伽藍は、意外に少ないので。予約した『客』が他に移るといったケースも珍しくない。人の訃報が電波を飛び交うことで儲かる営利商売である以上、競る心理が働くのも否めない。複雑な感情をない混ぜにした美穹乃は、軽度に錆びたオンボロ自転車をあちこち転がしていた。携帯電話を介しての喩樹との音信が途絶えた今、美穹乃は勘を頼りに寺院を巡るしかなかつた。

確か、喩樹には大学生の姉がいる。

めぼしい寺院をいくつか潰したあたりで思い出した美穹乃は、着信履歴には出現することのない名前をカテゴリーから探した。

「あつたあつた」

自転車のサドルに股がつたまま、美穹乃は小さな感動を覚えた。現在の座標は東山区から少しはみ出した辺り、圈外なはずがなく、

電話はすんなり通じた。短く、互いが本人であることを承知し合ひ。美穹乃は自転車を電柱の側に停め、重たい話題を切り出す。

「あの……突然ですが、早乙女さんのご両親がお亡くなりになられたつて、ホントですか？」

「そう、喩樹から聞いたのね……。本当よ。迷惑な話よね
どこか冷たいようで温かい、落ち着いた声が返ってきた。

「葬儀、今日なんですね？ 場所はどこですか？ あたしもお線香ぐらいは……。出席とまでは、いきませんけど」

早乙女夫妻と直接的な親交があつた訳ではない。それでも、友達である喩樹の両親なのだ。亡くなつたというのなら友達として、しらんぶりはできない。

「浄泉寺。市役所の近くよ」

「えっと……、浄泉寺ですね。あたし、行つたことがあります
美窓乃の座標からはやや距離がある。そこに辿り着くには、あの
鴨川を越えなければならない。

「それより、葬儀が今日だつて……驚いた？」

「え？」

「私の要望なの。できるだけ早い方が良いつてお願いしたら、親戚
で住職をやつているおじさんが『命日である今日が良い』って言つ
ものだから……」

（お姉さん。何を言い出すんだろう……？）

両親が逝つてしまつたといつのに、死を認めないとこりか自ら現
実味をそそつているのだ。

美窓乃には、信じられなかつた。

「いやいや、そんなのフツーですよ。嫌なことは、早く済ましちや
つた方が楽ですから」

例外はある。この場合、冥土に旅立つ仏様に對して薄情ではない
か？

他人の失言をフォロー。

美窓乃にとつて、それは十八番のよつなものだつた。

推定される到着時間もろもろを伝えた後、美窓乃は自分から通話
を切つた。

肺に吸い込んだ二酸化炭素を田一杯まで吐いた美窓乃は、傍らの
電柱に思いつきり背を預け、憎いほど蒼々とした無言の空を仰ぐ。
(遺された人は、皆すぐに忘れようとするんだ……)

朝、普段と変わらぬ様子で挨拶を交した喰樹も、両親をともにひつ儀式を後始末のように話す喰樹の姉も。

そして……、

世界で一番大切な存在だった幼馴染みがいなくなつたとき、躍起になつて忘れようとした

自分も。

〔7〕

「亡くなつたつて……本当だつたんだ」

信じていなかつたわけではないが、実際に葬儀独特の重たい空気を吸つたとき、美空乃は無意識に呟いてしまつた。幸い、至近に人はいなかつたので睨まれることはなかつた。

（これから、焼いて骨にしちゃうんだ……）

砂利の敷かれた参道に停まつている靈柩車の周囲には、五十人以上の老若男女が群がつていた。比較的、黒を基調とした重苦しい衣服が目につくが、中には仕事場から直行したらしい大工か職人風の中年や、艶やかな和服姿の芸者まで混じつていた。さすがに、大工は職業道具を手には握つてないし、芸者は化粧で顔を白くはしてなかつた。

何をすれば良いのか分からず、しばらく美空乃は立ち尽くしていると、

「来たんだ……」

背後から、声を掛けられた。

「喰樹?!」

制服のままの喰樹が、無表情で立つていた。喰樹は人影のない砂

利道を歩きながら、

「驚いてんの？ 居て当然でしょ、親の葬式なんだから……」

一度、顔を靈柩車の方へ向け、

「ほら、泣いてる人いないし。もう終わるよ」
淡々と話した。

砂利がこする音。

去ろうとする喻樹の腕を掴んだ美穹乃は、足許に敷き詰められた砂利のように収まりなく散らかる感情を抑えきれず、

「もつと素直になりなよ！ 悲しいなら……もつと、悲しそうに振る舞つたら？ それじゃあ、周りが分かんないじゃん。ちゃんと優しくできないじゃん！！」

言いたいことを言つた。

友人の性格を感情的に咎めた美穹乃に、後頭部を向けたままの喻樹はさらりと言い放つ。

「へえ……、美穹乃は同情したい人なんだ。ごめん、私はバス」

「そんな、言い方つて……」

砂利が激しく喧嘩する音。

「ちょっと、バスつてビーウー意味が解らないじゃん。待ちなよ。喻樹！」

無視して喻樹は、境内から駆けて出でていってしまった。

呼び止められなかつた美穹乃は、背に突き刺さる何かを感じて、慌てて後方に視線を飛ばす。

「何？ 誰かいるの？」

靈柩車の方角は、今は銀杏の木が死角になつて窺えない。どうやら、人の視線ではなかつたようだ。

「気のせいだよね。靈じや……あるまいし」

いつも美穹乃の不安を紛らしてくれる自己暗示は、今回ばかりはちゃんと機能しなかつた……。

太陽の笑顔は雲に遮蔽され、辺りは暗くなる。ややあって、美空乃が誇る栗色の髪が風にそよいだ。

(喻樹のお姉さんに挨拶しなきや)

思い立った美空乃は、銀杏の縄張り横断して靈柩車の待機する周辺に近づくことにした。重量感のある空気は、我慢するしかない。

喻樹の姉とは面識がある。もつとも、喻樹とは幼馴染みなのだから、あたりまえだ。

周囲の空氣に溶け込みつつある美空乃は、記憶を頼りに捜してい

ると

「旭川さん?」

電話で聞いた声がした。微妙に音質は異なつてはいたが、雰囲気はドンピシャだ。

「えつと、お姉さん……じゃなくて、早乙女樋さん。ですよね?」

社交辞令で愛想笑いしつつ、美空乃は尋ね返した。

「下の名前、覚えていてくれたのね。ありがとう」

頭でも下げる勢いで、樋は感激を示した。落ち着いた風采とはつてかわって、言動は外れたところがあるようだ。

「いや、はは……、人の名前を忘れたりなんかしませんよ。あたし、記憶力は自慢ですから」

(携帯のメモリー調べるまで存在すら忘れてたけど……、まあいつか)

「葬儀はほとんど済んじゃつたけど

帰り際の団体に肩を接触した樋は言葉を切り、「すみません」とお辞儀で詫びながら、美空乃の隣に肩を並べた。

「線香ならまだ間に合つかも。する?」

脇の美窓刀へ顔を向けて相は提案する
脣身の部類に入る匪を上目遣いで見据え、

「そりやーできれば、是非、します。そのために来たんですから」
美窓乃は応じた。

「やあ、いらっしゃい」と、おじいちゃんが笑顔で手を振る。

感情が詠み取れない声色で言つたのぢ
相は本堂に向かひて歩き出す。

（事故の詳細とか、誰から聞きたかったんだけど……）
首をきょろきょろさせて辺りを洞察しながら、樋の跡をつける美
空乃。

（不謹慎だよね。あたしつたら）

内意を拝つた美寧乃は、大人しく樋の背を追うこととした。不意に気になつて、さつき何かを感じた位置を顧みるも

あるのは、代わり映えもなくそこに屈座る銀杏の木だけ。小鳥すらいない。

(なあ～んだ、やつは『お』のせいじやん)

二〇

第一話 告げる風（後書き）

無知で浅学ながら、どうにかです。

もう自棄ヤケです。

京都の地理的な関係性は半ば仮想です。

それと、話は違いますが、小説から離れた文章での懶懶無礼な敬語は、相手が人生の先輩だと仮定しているからです。従来、小説は大人の嗜好品と定義されていましたから（百年も昔ですが）。でも、昨今的小説は意外と層が割れてないんですね。考えを改めます。されど敬語は放棄しませんので、悪しからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6191c/>

アマツ風に吹かれて

2010年10月12日05時36分発行